

おいで、一緒に行こう

これは、福島第一原発事故によって飼い主と離れ離れになった犬や猫を保護する、ペットレスキュー隊の活動を描いた本の題名です。

著者は作家の森絵都さんで、本の中に登場する人物はいずれも実名が使われており、文字通りのノンフィクションです。

3月11日、あの東日本大震災、そして福島第一原発の事故によって、被災地では突然人が消え、数多くのペットや、家畜が取り残されました。彼ら動物たちは、いったい何が起こったのか分からず、ただ去っていった飼い主達を待つばかりの状況に追いやられてしまったのです。

被災者の中には、車で逃げる時飼い犬がどこまでも追いかけてきて、スピードを上げて振り切って逃げて来たという人がいます。「おいで、一緒に行こう」という本を読んでいると、彼らにはその時の記憶が心の奥底に哀しみの澱となって沈殿し、今なお苦しみ続けているのだということが分かります。

あの混乱した状況の中では、人間の安全確保が最優先されるのは当然です。そのことは理屈では分かっているとしても、それで自分の心が癒やされるという訳ではないというのは、我が家にも我が儘な同居人（愛犬）がいますので、良く理解できます。

かつて有珠山が噴火した際、私は現地対策本部で対策に当たっていたのですが、その折りにも、避難が長引く中で、被災者からペットや家畜を助けたいという切実な声を多く聞きました。被災者の中には、避難命令を無視してペットや家畜に餌をやるため自宅に戻る人達も出てきて二次災害を心配したものです。

このように、災害が発生した場合、住民の安全だけではなく、人間と生活を共にしてきた動物達をどう守るかは決して無視できない問題なのですが、現実には、今回の災害においても、この問題は後回しにされたままになっています。

被災地では、多くの動物たちが、飼い主を待ち続けながら死んでいったと思われれます。しかし同時に、地元住民達が被災地圏内に残された動物を不憫がり、徒歩や自転車で餌やりに通っている人がいるらしく、厳しい環境の中でも逞しく生き延びている犬や猫が沢山いるという話を聞くと、少しはほっとします。

震災発生から2ヵ月程経った頃、著者の森さんは、「被災地の犬や猫たちはどうなったのだろう。生きているのか死んでいるのか。水や餌はどうしているのか」が気になり、取材を始めます。そうした折、福島でペットレスキューの活動をしている中山あきこさんを知り、彼女に同行し、ほぼ半年余りにわたって密着取材することになります。

中山さん等のレスキュー隊は、災害発生の直後から犬や猫の救出活動に当たってきており、福島第一原発から20キロ圏内への立ち入りの規制が始まった4月20日以降も、規制区域内でレスキュー活動を続けています。

当然20キロ圏内への立ち入りは許されていませんので、検問の目を逃れ、時にはバリケードを動かし、警察に見つかれば「ごめんなさい。すぐに出ます。」と謝り、進入路はごまかす。という訳で、悪いことをやっているわけではないのにどこか後ろめたさを感じながら活動をしている、というのが実態のようです。

勿論、行政もペットの問題について手を拱いていたわけではないようで、福島県は、3月11日から4月27日にかけて20キロ圏内のペットの実態調査と保護活動を実施したそうですが、著者の森さんは、その際福島県が保護したのが犬8頭という少なさに驚いています。早い段階から、行政が愛護団体等と連携して対応すれば、より多くの命を救えたのではないかと思います。

森さんは著書の中で、「行政は、被災者にペットを置いて行けと強いたのなら、事態がある程度収束したら、ペットを救う助成ぐらいはすべきではないか」という一被災者の声を載せていますが、これは被災者の率直な感想とって良いでしょう。

被災者は、少し落ち着くと残してきたペットのことが心配になり、ペットレスキュー隊に救助を求めてくるそうですが、レスキュー隊自体、人手も犬猫の預かり先も不足しているのが現状といわれています。それでも、中山さん等レスキュー隊の人達が福島に行くのは何故なのか。著者の森さんは、「ペットを失った飼い主のため、ペット自身のため、そして恐らく彼女自身の止むにやまれぬ性分にもよる」と書いていますが、その止むにやまれぬ思いは著者自身のものでもあったのではないのでしょうか。

また、森さんは、「行く度に状況は悪くなっているのに、過去としてしか伝えられない無力感があった」とも書いています。しかし、誰かが語らねば何も伝わりません。森さんには、これからも現代の語り部として、書き続け、伝え続けてくれることを期待しています。(塾頭 吉田 洋一)